

大学生のレポート作成技術を伸ばす授業シラバスと 指導法の設計

—— ライティングの高大接続をめざした初年次新設科目「入門演習」の実践報告 ——

串 田 紀 代 美

1. はじめに

近年、日本の初等中等教育の現場において「書けない」生徒が増加しているとの指摘がある。一方、高等教育機関では入学試験や成績評価のための記述式試験およびレポート作成など、ある程度まとまった量の文章を書く機会が増加する¹。高校までの文章表現技術の学習が、大学でのレポート作成のためのライティング技術の習得とうまく連動しているとは言いがたい状況もある。高校までの授業では詳しく指導されなかったレポートの作成技術を、大学では、いつ、どのように指導するのが適切かつ効果的なのだろうか。

実践女子大学では初年次教育として「実践入門セミナー」が必修の共通教育科目に位置づけられている。当該授業は、高校から大学へと学習が円滑に移行できるよう、高校と大学の学び方の相違点、自己評価およびポートフォリオの活用を意識化させる授業内容に加え、大学でのレポート作成技術について説明する機会も提供してきた。しかし、依然として日本語の基礎的知識およびレポート作成技術の習得に問題があったため、美学美術史学科では2018年度からレポート作成技術の指導に特化した初年次教育専門科目「入門演習」を開講した。

文部科学省によると、全国で初年次教育を実施する大学は2016年には715大学（97.1%）に上り、そのうち学部全体で実施している大学は623大学（85%）であるという²。その中で最も多くシラバスに組み込まれているのがレポート・論文の書き方をはじめとする文章作法を身につけるためのプログラムである³。このようにレポートの作成技術を向上させる指導は大学の初年次教育の定番とも言えるが、教育実践の詳細や学生の反応、レポートを作成する過程で学習成果が高い項目または学習成果が低い項目の有無、最終的に授業終了時に学生は論理的に「書く」技術が習得できるのか、また学生自身の満足度は実際にどのように語られているのかといった点については、議論が少ないように見受けられる。

そこで本稿は、大学の初年次教育における高大接続を視野に入れ、筋道を立てて考えそれを言語化し、一貫性のある文章記述を目標としたレポート作成技術を初年次学生が身につけるために、2018年度に新設された美学美術史学科専門科目「入門演習」の授業実践を振り返りつつ、学生の満足度や学習困難点をリアクション・ペーパーから分析し、高大接続をめざした初年次教育としてのレポート作成技術の指導の具体的かつ効果的な在り方を探ることを目的とする。

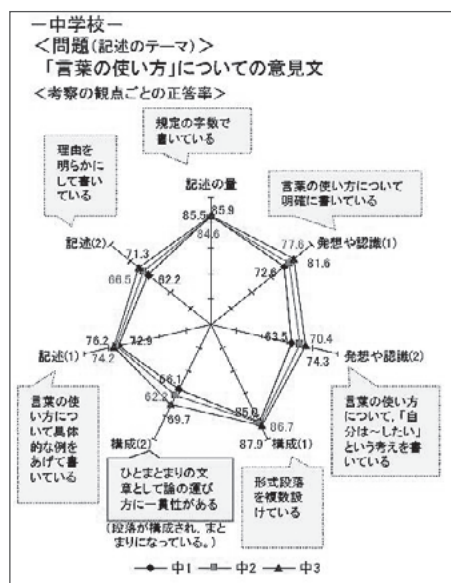
2. 初年次教育「入門演習」開講とライティングの高大接続の問題点

2-1 「書けない」生徒の増加と高校の国語教育における言語表現技術の指導

田中（2019：4）は、「特定の課題に関する調査（国語）」（国立教育政策研究所教育課程研究センター、平成18年7月）⁴で実施された「漢字に関する調査」と「長文記述に関する調査」のうち、「長文記述に関する調査」の結果に言及している。当該調査は、主に「記述の量」、「発想や認識」、「構成」、「記述内容」など合計7項目について全国の小学校高学年から中学生を対象に実施したものであるが、調査結果によれば義務教育終了時点で約3割以上が「ひとまとまりの文章として論の運び方に一貫性がある」という評価観点の正答率が低かった【図表1】。つまり、「書けない」生徒の具体的な特徴の1つは、「結束性があり筋道の通ったまとまりのある文章を書く」ことができない点である。

原因として、「書けない」生徒は文章全体の書く内容を決定する前に書き出し、その後は構成を無視して思いつくままに言葉を連ねてしまう傾向にあることを、田中（2019：5）は推測している。これは長文記述力の育成のみならず、大学で必要とされるレポートや論文の作成指導においても鍵となる点であろう。

【図表1】中学生の長文記述に関する調査結果



※「特定の課題に関する調査」（平成18年7月）より転載

「書けない」生徒が増加しているもう一つの原因は、初等・中等教育において「書く」指導が十分に行われていない点であろう。渡辺（2017a：13）は、大学1年生に対して行われた高校におけるライティングの学習経験についての調査結果に言及している。この調査は、2003年3～11月に全国7大学の新入生598人を対象として実施されたものである。その結果、「意見文や説明文を書く方法を学習すること」の経験がなかったと答えたのは、文系で28.9%、理系で39.5%であった。また2009年の新入生357名を対象に行った「高校国語での書く学習経験の有無」を尋ねた調査では、学習経験がないと回答したのが41.2%であった（渡辺 2017a：14）。「書けない」生徒が増加する背景には、書く機会の少ない教育現場の存在が見え隠れする。

中学生の段階ではどのような問題が存在するのであろうか。前述の「特定の課題に関する調査（国語）」では、中学校教師に対して質問紙調査を実施している。その中で、「書くことの授業で、特に工夫している事項はどれか」という質問に対する回答として最も多いのは「感想文」であり、次いで「報告や発表の資料を作る」であった⁵。さらに「書くことの授業で、どれくらいの分量の文章をよく書かせているか」という質問に対し、「400字程度の文字数」と回答した教師が最も多かった。「書く」以前に長文読解の機会も減少傾向にある中で、こうした回答からは、文章表現技術の指導が実施されても「意見文」や「報告文」などの学習にとどまっていることが推測される。

では中学での教育現場で実施されている文章表現技術の指導は、高校段階で変化するのであろうか。渡辺（2017b：39）は、高校で主に言語技術を扱う教科、「国語」で使用する教科書（国語総合、国語表現、現代文b等）の中で学習する文章表現技術の傾向を調査した。その結果、高校の教科書で扱う文章表現技術の課題内容は、意見文、報告文、小論文であることが明らかになった。つまり高校での文章表現指導は、グループや個人で特定のテーマに沿って調べた学習内容をまとめたり、あるテーマに基づく意見を述べたりすることにとどまっているのである。一方、大学のレポートでは、論点を絞り、根拠を挙げ、事実と意見を区別した上で、レポートの構成、章立て、引用、参考文献表記など種々の約束事に沿って自身の考えを秩序立てて提示する技術が必要となる。いわゆる「ライティングの高大接続」が十分に行われない原因は、高校までの国語における文章表現技術の学習内容と、個々の大学教員が期待するレポートの構成や内容が一致しない点にあると考えられる。

こうした高校までの「書かない」教育現場の状況を考慮すると、大学初年次教育でのレポート作成技術の指導は、どのような項目を、いかなる順番で、どの程度行えばよいのであろうかという疑問が湧く。この疑問に一つひとつ回答すべく、以下ではまず初年次教育新設科目として美学美術史学科が2018年度から開講した「入門演習」の初年度の授業実践について報告する。次にリアクション・ペーパーの分析から学生が苦手意識を持った学習項目を取り上げ、レポートを書く技術を習得するための方策とシラバスの内容を検討する。

2-2 高校で指導しないレポート作成技術の要素

まず、大学入学後に必要となるレポート作成技術に不可欠で、なおかつ学習が困難な項目を整理しておきたい。高校時代の国語教育では意見文、感想文、報告文、小論文が指導の対象となる。そのため初年次教育において円滑な高大接続をめざすには、大学のレポート課題で要求される学術的文章の特徴を理解し、高校までの作文や感想文と比較し相違点を明確にする必要がある。

その筆頭に挙げられるのが、文献検索によって収集した情報を取捨選択し、さらに複数の話題の中から1つの視点に着目した上で論点を絞ることである。大学入学直後の学生にとって、比較的大きなテーマから自身が気になる視点を抽出し、不要な情報は切り捨てた上で特定の論点を一人で導き出すのは至難の業である。マッピングやKJ法⁶など発散型思考法は高校までの学習である程度経験した学生も存在するが、大学入学以前に収束型思考を意識的に経験している学生は稀である。この点については、批判的思考態度やメタ認知的能力の開発等も関連させながら、新たな教育方法が開発されることを期待したい。

大学でのレポート作成指導で学生にとって次に困難な点は、引用方法と参考文献表記である。高校までの国語で扱われる意見文や感想文の作成には、他者が記した文献や資料を読み、それを論拠としながら自身の主張を補強するといった技術はほぼ必要とされない。自分以外の他者が記述した文章を無断で転写することは「盗用」あるいは「剽窃」と見なされる。そのため、出典を明らかにすることで、どこまでが自分自身の考えであるかを認識することが可能となり、その上で他者の考えを借用しながら主題をいかに補強するかがレポート作成の過程では重要となる。しかし、自身の主張の根拠を示すためとはいえ、過剰な引用で埋め尽くすことがないように必要最低限の引用方法を身につける必要がある。そのため、直接引用（ブロック引用）、間接引用に関する文章作法の詳細を認識し厳密に従う必要がある。

さらに、大学におけるレポート作成技術の指導にとって不可欠であり学生にとって習得が非常に困難な点は、いわゆる段落構成の技術である。レポート・論文の執筆では、論理の一貫性が重要となる。つまり序論、本論、結論を通して主題（トピック）が終始一貫している必要があり、高校までの国語教育で頻繁に扱われる「起承転結」文のように、主題が「転じる」文章は論理的な文章として認められない。そのため、中心となる主題文が冒頭に記述される「パラグラフ・ライティング」という手法が、論理的な文章作成に有効である。ここで言うパラグラフとは、意味のまとまりのことである。一見すると、段落とパラグラフは類似しているが、パラグラフは意味のまとまりとして1つの主題を結束する作用を持っている。

パラグラフの構成要素は、まず冒頭に1つの主題文（topic sentence、中心文）があり、その下には主題文の内容をさらに具体的に証拠づけるような支持文（supporting sentence）が結束している。これは冒頭の主題文の意味を補強するような機能がある。このパラグラフが複数組み合わせたり、レポート・論文の本論を構成する。その際、意味の結束性を持ったそれぞれのパラグラフの冒頭にある各主題文を列挙すると、それらがアウトラインとなり首尾一貫した論理が展開される。この文章構成が、パラグラフ・ライティングの特長なのである⁷。

パラグラフ・ライティングは英語圏のアカデミック・ライティングの授業で指導されており、教材も多数出版されている⁸。しかし、近年では大学の初年次教育におけるレポート・論文の文章作成技術を向上させる取り組みの普及により、結束性のある首尾一貫した論理展開が可能なパラグラフ・ライティングを指導する機会が増加している⁹。

最後にレポートを執筆した後で必要となるのが、教師の評価観点を理解した上でフィードバックに従い自身の文章を修正する技術である。教師は、あらかじめ評価観点をルーブリックとして学生に提示する。これを Can-do Statement のように指標として使用することで、教師の評価観点および

学生に求められるレポートの水準が明確になり、教師と学生とで共有することが可能である。ルーブリックについては本稿 3-3 で説明する。

本項のまとめとして、高校までの学習項目に含まれず大学のレポート作成段階で要求される項目を以下に列挙する。渡辺（2017d）では、文章を「組み立てる」技術、引用の具体的技術、推敲の具体的技術、再帰的な文章作成を提案している¹⁰。本稿は、初年次教育「入門演習」で習得が不可欠なレポート作成技術として以下の4項目に着目した。

- (1) 情報を取捨選択する技術
- (2) 1つの視点で論点を絞る技術
- (3) 引用の技術
- (4) 論理的に段落を構成する技術「パラグラフ・ライティング」

2-3 高大接続としての初年次教育「入門演習」の位置づけ

実践女子大学では、全学部において初年次共通教育科目「実践入門セミナー」を前期必修科目に位置づけている。高校と大学との学びの相違点やノート・テーキングの習得に加え、文学部美学美術史学科では本学併設の香雪記念資料館、東京国立博物館、国立西洋美術館の3館の見学のほか、これに関連する事前・事後学修として美術作品鑑賞、報告書の作成、レポートの作成技術に関する指導を学科独自の授業として実施している。また、美術史の専門研究の準備段階としての位置づけを持つ「基礎演習」（2年次履修）の一部においても、レポートの作成技術の指導が含まれている。

筆者は2002年度から2012年度まで2年次履修科目の「基礎演習」を担当し、2017年度からは2年次以上が履修可能なレポート作成技術を指導する「文献研究Ⅰ」を担当してきた。しかし、レポート課題は初年次からあり、首尾一貫した論理展開を持つレポート作成技術を可能な限り早期から指導する必要があるため、初年次教育「実践入門セミナー」を引き継ぎ次年度の「基礎演習」への橋渡しとなる科目として、2018年度から美学美術史学科専門科目「入門演習」が開講された。

次章では、「入門演習」の教育実践と学生にとっての学習困難点や自己評価等について報告する。

3. 「入門演習」1年目の実践報告

3-1 授業目標とシラバス

美学美術史学科専門科目「入門演習」は、1年次の後期開講科目である。学生にとって「入門演習」は必修科目ではないが、可能な限り履修するよう指示がある。2018年度は筆者を含む非常勤講師2名が計4クラスを担当した。教科書は桑田（2015）を使用した。

授業テーマとして、大学で課されるレポートは学術的な文章が要求され、自ら問いを立て、その問いに答えるため、情報を集めて整理し、論理的に考えた結果を文章にする技術が必要である点を強調した。そのため授業では、「読む」「書く」行為に焦点を当て、レポート作成技術を段階的に身につける必要があることを説明した。

授業の到達目標として、以下の6項目を掲げた。1) レポートの形式や構成を知り自ら問いが立てられる、2) 論点を絞り意見や主張が明確に文章化できる、3) 自分の主張を支える論拠が具体的に示せる、4) レポートの文章にふさわしい定型表現で書くことができる、5) 引用や参考文献表記のルールが理解できる、6) 振り返り学習やフィードバックにより自身の文章を推敲し修正ができる。

シラバスは以下の通りである。

- 第1週 作文・感想文との違いを知る、「報告型レポート」を読む
- 第2週 形式や構成を知る、「意見文」を批判的に読む
- 第3週 レポートに必要な発想力をつける（発散型思考と収束型思考）
- 第4週 批判的思考力でレポートの主張を考える
- 第5週 課題発見力で論点を考える
- 第6週 論点を絞る、論理的に意見をまとめる
- 第7週 ピア活動でアウトラインを検討する①、パラグラフを書く
- 第8週 ピア活動でアウトラインを検討する②、パラグラフを読む
- 第9週 情報を検索する、読解ストラテジーで必要な情報を選ぶ
- 第10週 レポート執筆をスタートする（序論＋結論）
- 第11週 引用のルールに従い引用箇所を明示する
- 第12週 参考文献表記や脚注のルールに従い記述する
- 第13週 文章・表現・形式を点検し文章を推敲する
- 第14週 フィードバックをもとに修正する、学習プロセスを振り返る
- 第15週 まとめ、教員のレポート評価観点を知る

3-2 重要学習項目と協働学習を促す仕掛け

授業目標およびシラバスに沿って授業を進める過程で、特に重視した点は次の通りである。15週間にわたる授業を通して繰り返し強調した点は、レポートが「問い」と「答え」で構成されており、自ら立てた「問い」に対する「答え」を導く過程で、誰もが納得する事実、つまり「証拠」を提示するという点である。学生自身が自らの疑問や「問い」を積極的に発見するため、クラスメート同士で5W1Hを使って疑問文を作る練習、あるいは批判的思考態度を促すためにリサーチ・クエスチョン力を向上させるタスクを実施した。

次に重視したのは、「問い」と「答え」が明確になった上で、論点を1つに絞り、レポートの読み手がその主張に関して納得できるような「証拠／根拠／論拠」を見つけ出すための準備として、教師は個々の学生に対しリサーチ・クエスチョンを投げかけながら、個別相談の形式でレポートの論点を協働的に決定することである。その上で、主張を補強するための「論拠」の収集のために、CiNiiなどの情報検索ツールを使い、収集した情報を精読することを指示した。前述の通り、ここでは適切な「証拠」を提示し、それが主張と一致する実証的な根拠となるよう、収集した情報の取舍選択を行うことを再度強調した。実は、これが学生にとって困難点の一つであった。

さらにレポートの本論執筆で困難を極めたのが、文章構成力を養うための「パラグラフ・ライティ

ング」の習得であった。首尾一貫した主張を心がけるため、「1パラグラフ1トピック」を呼びかけた。同時に、先述したパラグラフの中心文が、アウトラインを兼ねることも強調した。しかしながら「パラグラフ・ライティング」の学習経験が皆無である大学1年生にとって、2つの新たな作業を同時進行で行うのは非常に困難であったことが、当該授業後のリアクション・ペーパーの分析により明らかとなった。

執筆作業とともに、重要性を強調したのが「読解力の向上」である。レポートを書く技術の向上には、読解力および読解の技術の向上が鍵となる。そのため読解ストラテジーを意識化させることが必要であった。具体的には、キーワード、主張や論点、疑問点をマークし、内容を要約しつつ精読する習慣づけを行った。さらに、レポートのモデル文を読み、レポート・論文の定型表現と各機能に着目し、レポート執筆の際に使用することを徹底した。

すべての学生の執筆作業の目処が立った最終段階で、何が「剽窃」行為や「盗用」行為に当たるのか、具体的な事例を考えた上で「剽窃」防止策としての引用技術を習得し、他者の意見と自己の意見を区別することを徹底した。

最終段階でレポート作成プロセスを振り返り、フィードバックをもとに推敲と修正ができるようにするため、2回の提出と添削を義務付けた。返却時には個々の学生にフィードバックを口頭で伝え、疑問点があればその場で解決できるよう話し合った。

同時に、大学教員のレポート評価観点を理解するため、ループリックで自己評価を行い、大学生に求められるレポートの水準と合格するレポートの具体的な形を各学生がイメージできるようになることを目標とした。

3-3 成績評価と教師が考えるレポートの困難点

成績評価は、授業参加 30%、提出物 20%、学期末レポート 50%を総合的に判断した。授業では、ほぼ毎週課題提出を課し、「提出物 20%」として評価した。課題内容は、1段落の短い文章作成から、文章スタイルの変換、クイズなど多種多様であった。学期末レポートは、3つのテーマから1つを選択し、各自が主題を提示し 2000 字程度で論述した。成績評価は、2回の提出および2回の添削を徹底し、授業であらかじめ提示したループリックや教員のフィードバックに基づき加筆訂正し、改善点が認められれば高く評価した。

なお、ループリックの評価観点は以下の通りである。

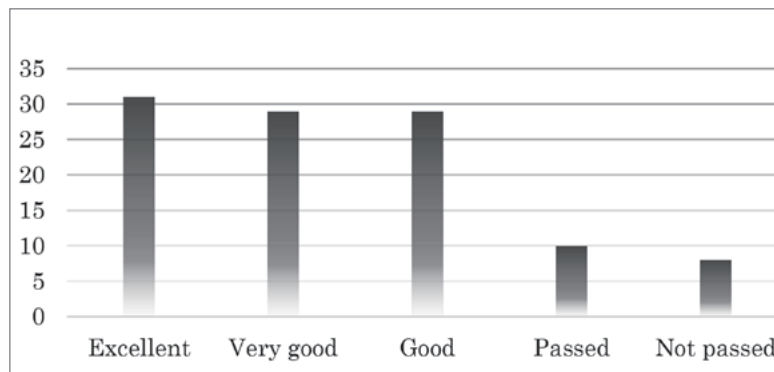
- ① 構成を意識している
- ② 論点が絞られている
- ③ 定型表現で記述している
- ④ 「剽窃（盗用）」防止のため、引用・脚注の意味を理解し正しく表記ができる
- ⑤ 参考文献表記ができる
- ⑥ 1回目のフィードバックをもとに、2回目のレポートを改善することができた

成績評価は「レポート 50%」のうち、1回目を 20 点満点、2回目を 30 点満点とした。1回目（20 点）の内訳は、①構成（章立て・見出し）、②パラグラフ・ライティング、③定型表現、④参考文献表記

の4項目を各5点×4=20点とし、2回目(30点)の内訳は、①構成(章立て・見出し)、②パラグラフ・ライティング、③定型表現、④参考文献表記、⑤引用、⑥改善された点の6項目を各5点×6=30点とした。2回のレポート添削を通して最重要視したのは、「修正できたか」という点である。

1学年全体の成績評価は、次のグラフのような結果となった。

【図表2】2018年度「入門演習」の成績評価(全体)



授業での学生の反応やリアクション・ペーパーの分析、および学期末評価からは、以下の点がレポート作成技術を初めて学ぶほぼすべての学生、あるいは一部の学生にとって学習の困難点であったことが示唆された。

- レポートの構成、具体的には「問い」と「答え」の一致、および「パラグラフ・ライティング」の理解
- 情報検索
- 論点や視点を1つに絞ること
- 情報の取捨選択
- 推敲と修正
- 教員の評価観点(ループリック)の理解とループリックに基づいた自己評価の実施

これらの項目は、高校時代の国語授業や文章表現技術で指導されなかった学習項目である。こうした未経験の学習項目は、時間をかけて繰り返す必要性があるほか、個々の学生によっても習得時間や方法が異なるため、15週間の一斉授業では身につかないことが容易に理解できよう。

3-4 リアクション・ペーパーの分析と学生自身の気づき

学生自身の言葉で語られたリアクション・ペーパーからは、レポート作成技術の学習過程での困難点をはじめ、自己成長に関する言及まで実にさまざまな反応が得られた。レポート作成技術に関しては、2回の添削とフィードバックを経た結果、多数の学生に大幅な改善が見られた。また2回目添削後に返却する際のフィードバックでは、多くの学生は教師が指摘する前に自身のレポート修正点に気づくことができた。

学生自身による具体的な記述は、以下の通りである。

【図表3】2018年度「入門演習」履修者によるリアクション・ペーパーの自由記述（抜粋）

言及した項目	リアクション・ペーパーにおける学生自身の言葉
文章の執筆（全体）	<ul style="list-style-type: none"> ● 授業を受け、何一つ理解できていなかったレポートの書き方が前より理解できたのではないかと思った（中略）努力したい ● この授業を受けるまではレポートの書き方に細かくきまりがあると知らなかった ● 作文とレポートの違いが分かった ● 1年生から学んでいてよかった ● 前期のレポートは、ほとんどすべてのルールを破ったレポートを提出していたんだと、この授業を受けて知った ● レポートを書くことは、もう慣れるしかないなと身にしみて感じた
情報の取捨選択 (パラグラフ・ライティング)	<ul style="list-style-type: none"> ● 不必要な情報があると、とても文章が読みづらかった／つながりを持った文を書くよう心がけたい ● 不必要な情報が入ったパラグラフを読んで（中略）支持文のつながりに注意して書くことを心がけたい ● 不必要な情報が入ったパラグラフを書いてしまっていたので、次、論文を書くときには気をつけたいと思った ● 他人が書いた文章だと冷静な判断（文章が適切かどうか）ができるのだと改めて思った ● 客観的になぜこのパラグラフが読みにくいのか、この筆者が伝えたいことは何かについて考えることができてよかった
パラグラフ・ライティング	<ul style="list-style-type: none"> ● パラグラフ・ライティングがなかなかうまく作れない ● 自分の文章だと何を中心に書き、どの情報を支持文に書くのかで混乱してしまう
文章構成	<ul style="list-style-type: none"> ● しっかりと章立てをしたりするのは大変だと思った
修正	<ul style="list-style-type: none"> ● アドバイスを参考にがんばって書き直した／前回提出したものよりも良いものになっていたらいいと思う ● レポートの修正が難しい／情報の整理は大事だと思う
推敲	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分で書いたレポートを読み直して書き直すということが非常に難しかった ● チェックしたところを直して改めて印刷したレポートは、前よりすっきりと読みやすいように感じた ● 自分の書いた文をじっくり見つめ直すことができてよかった ● 自分でも十分見直して書き直したつもりでいたが、実際もう一度じつと落ち着いて読んでみると、まだまだ文章がつかないところやまとまっていなくて多いところが多く見られた

串田：大学生のレポート作成技術を伸ばす授業シラバスと指導法の設計

言及した項目	リアクション・ペーパーにおける学生自身の言葉
引用・脚注	<ul style="list-style-type: none"> ●注の入れ方がわかってよかった ●引用や脚注の書き方は知らないことが多くあったので、しっかり覚えて、今後の課題にも生かしていきたい。
満足度・自己成長	<ul style="list-style-type: none"> ●最後に書き上げたレポートに、今まで授業で習った多くのことを生かしたような気がしたため嬉しかった ●まだ簡単ではないが、最初の授業よりもだんぜん今のほうが、レポートが書ける力、内容が上達したなと思った ●この授業を通して少し成長できたのだと思った ●全体を通して少しは成長できたかなと思う ●はじめてレポートを制作した、レポートは決して楽しいものではなかったが、また作ってみたいと思った ●15回の授業を終えた今、レポートに対して自信がついた

授業後の感想は概ね良好であった。パラグラフ・ライティングは学生にとって習得が困難な学習項目が多数含まれていたが、一部の学生には習得しようという強い意欲が見られた。主題に一貫性のあるパラグラフの執筆は、学生自身でコントロールするには訓練不足ではあるが、他者が記述した結束性のないパラグラフを読むと不備な点が認識できることが、【図表3】「情報の取捨選択」欄にまとめた学生による自由表記から示唆された。レポート執筆に関する規則が想像以上に多く、レポート執筆は学生にとって簡単な作業ではないが、授業を通してレポート作成に関する作法を認識することができ、自己成長を感じた学生が一定数存在していたことも今回の分析で明らかとなった。

しかし、今後の課題も明確となった。首尾一貫した論理展開に関するコメントが皆無に等しい点からは、多くの学生が意識を向けることの少なかった技術であることが示唆された。また実証的な根拠の提示のための文献の精読および読解ストラテジーに関しても、学生の反応は少なかった。レポート構成の理解は可能であるが、それが自身のレポートに反映させられない学生の存在も確認できた。

文章記述に関して言えば、高校の学習スタイルから脱出できず、主観的表現が改善できない、論点や要点が絞れず視点が定まらない、調べた情報をすべて記述しようとする傾向が強く情報の取捨選択ができないといった問題も目立っていた。これに関連して、大量に収集した文献情報等から自分自身の視点を1つに定める訓練、あるいは情報の取捨選択の訓練が不足していることも明らかとなった。

引用に関しては、学生は剽窃の意味や引用の必要性を理解することができても、それを防止するための引用表記、特にページ数を正確に記入することが疎かになるほか、要約力が低く、結果として罪悪感なく他者の記述を転用してしまうケースが数多く発生した。また作文レベルの基本的事項が共有されていない、客観的表現（事実）と主観的表現（意見）の区別ができない、文献には書籍が少なくインターネットから得た情報をもとにレポートを執筆していた学生が非常に多いなど、今後の課題を挙げれば枚挙に暇がない。

さらに、集中力が持続せず授業内容や教員の説明が理解できず課題遂行がままならない学生、

基礎読解力および学習意欲の乏しい学生が一定数存在するという問題が浮上した。文章技術の高大接続を考える以前に、基礎読解力の向上と個々の学生が抱える問題点の把握およびそれに対する指導法の確立が早急な課題となった。

4. まとめと今後の課題

本稿では、2018年度美学美術史学科の初年次教育新設科目「入門演習」の授業実践を振り返りながら、大学におけるライティングの高大接続を円滑に行い、秩序立てて物事を考え論理的な構成をめざすことを目的としたレポート作成技術の指導について考察した。さらに、授業終了時の学生の満足度や学習困難点をリアクション・ペーパーから分析し、高大接続をめざした初年次教育としてのレポート作成技術の指導の具体的かつ効果的な在り方を探った。

その結果、高大接続をめざす大学初年次教育としての「入門演習」では、次の学習項目が学生にとって困難であったことが示唆された。具体的には、「問い」と「答え」の一致、および「パラグラフ・ライティング」の理解、収集した情報の取捨選択、視点・論点の提示、引用・脚注などレポート特有の表現技術の未習得などの学習困難点が数多く示唆された。これらに加え、読解力が一定基準に満たない学生の存在も明らかとなった。

一方、レポート作成技術の指導後は、教員の評価観点およびループリックの理解、ループリックに基づく自己評価の実施、教師のフィードバックに基づいた修正などは、習得可能な項目であることが判明した。さらに、レポート全体の構成やパラグラフ・ライティングの結束性について自ら気づきを得た学生の存在も明らかとなった。学生が自分自身で内省を促し、推敲を経て修正が可能となり、その結果レポートの質が向上し、自己成長を感じた学生も少なからず存在した。

今後は、2019年度教育プロジェクトの支援を受け、初年次教育教材および基礎学力判定テスト（日本語）等を活用しながら、大学のレポート作成技術に必要不可欠であり、なおかつ高校では未習得の文章作成技術に関わる学習項目をより正確に洗い出し、成績上位層と下位層の格差を狭めるための工夫が必要である。さらに他学科との協力を視野に入れながら、成績分布と入試制度との関連性の有無についての検証、「書くこと」「考えること」の学生自身の自己評価形成への影響分析を行う予定である。

付記

本稿で取り上げた「入門演習」開講にあたり、宮崎法子先生（実践女子大学文学部美学美術史学科教授）には多大なるご尽力とご指導を賜りました。また授業運営には、加藤陽子先生（当時、実践女子大学文学部美学美術史学科非常勤講師）のご協力を賜りました。本研究に対してお力添えをいただきましたすべての皆様に、心から感謝を申し上げます。

注

- 1 大学入試センター試験に替わって 2021 年度より実施される大学入学共通テストでは、従来のマークシート式に加え国語と数学の一部で記述式問題が出題される予定であった。
- 2 「平成 28 年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」令和元年 5 月 28 日 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室、p.14。文部科学省（2019）「平成 28 年の大学における教育内容等の改革状況について」は、2017 年 12 月から 2018 年 2 月にかけて全国の国公私立 776 大学を対象に文部科学省ホームページの調査票・回答票を通して実施した調査結果の概要がまとめられたものである。http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2019/05/28/1417336_001.pdf（2019 年 11 月 3 日閲覧）
- 3 前掲注 2 の調査結果の概要（p.14）には初年次教育の具体的内容が記載されており、全国の大学で実施されている初年次教育の傾向が把握できる。
- 4 田中宏之（2019：4-5）によれば、いつ頃から「書けない」児童・生徒の増加傾向にあると考えられるようになったのかを探るため、「特定の課題に関する調査」（国立教育政策研究所教育課程研究センター、2006 年 7 月）の「長文記述に関する調査」の結果分析により、「書けない原因」を総合的に捉えることが可能だとしている。なお本調査は、2003 年 10 月 7 日の中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」で提言され、2005 年 1～2 月に全国の小学校第 4 学年から中学校第 3 学年までの各学年 3000 余人を対象として実施されたものである。<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei/04002010000007001.pdf>（2019 年 11 月 3 日閲覧）
- 5 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2006）「特定の課題に関する調査（国語）調査結果（小学校・中学校）平成 18 年 7 月」p.50-51。
- 6 KJ 法とは文化人類学者の川喜田二郎の考案した情報の整理方法である。
- 7 パラグラフ・ライティングの誕生と日本での普及、および大学のレポート作成技術の指導におけるパラグラフ・ライティングの必要性については、渡辺（2017c：177-179）が詳しい。
- 8 英語圏で使用されているアカデミック・ライティングの教科書には、Oshima, Hogue (2017) などがある。
- 9 アカデミック・ライティングという目的に限らず、内容が一貫した文章を作成するためパラグラフ・ライティングの指導に特化した教材には田中・阿部（2014）がある。
- 10 渡辺（2017d：55-58）は、高校までに教えられないライティングの技術として、パラグラフ・ライティングの技術や引用、推敲の具体的技術、再帰的な文章作成の技術を挙げている。特に再帰的（reflexive）な文章作成法は、自己モニタリングや自己調整学習といったメタ認知的活動との関連性もあり示唆に富む指摘である。読んで書き直す作業を繰り返すような、行きつ戻りつ思考を深めていく作業が重要であることを指摘している。

参考文献

井下千以子 (2014)

『思考を鍛えるレポート・論文作成法』第 2 版、慶應義塾大学出版会

桑田てるみ編 (2015)

『学生のレポート・論文作成トレーニング ―スキルを学ぶ 21 のワーク― 改訂版』実教出版

田中宏幸 (2019)

「書けない原因の究明と課題解決の方策 ―『長文記述力に関する調査』を手がかりに―」

『日本語学』第 38 巻第 3 号 (2019 年 3 月号)、明治書院、p.4-11

田中真理・阿部新 (2014)

『Good Writing へのパスポート ―読み手と構成を意識した日本語ライティング―』

くろしお出版

文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 (2019)

「平成 28 年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要)」令和元年 (2019)

5 月 28 日付

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2019/05/28/1417336_001.pdf (2019 年 11 月 4 日閲覧)

渡辺哲司 (2017a)

「高校におけるライティング学習の経験はどれほどあるか」渡辺哲司・嶋田康行

『ライティングの高大接続 ―高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ―』

ひつじ書房、p.9-18

———— (2017 b)

「高校ではどのようなライティング技術が教えられるか (1) ―レポートとして―」渡辺哲司・

嶋田康行『ライティングの高大接続 ―高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ―』

ひつじ書房、p.35-46

———— (2017 c)

「なぜ大学で『パラグラフ・ライティング』を教えなければならないか」渡辺哲司・

嶋田康行『ライティングの高大接続 ―高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ―』

ひつじ書房、p.163-179

———— (2017 d)

「高校ではどのようなライティング技術が教えられるか (2) 一意見文、小論文ほか『書くこと』

一般として―」渡辺哲司・嶋田康行『ライティングの高大接続 ―高校・大学で「書くこと」

を教える人たちへ―』ひつじ書房、p.47-58

渡邊淳子 (2015)

『大学生のための論文・レポートの論理的な書き方』研究社

Oshima, A., Hogue, A., (2017) Longman Academic Writing Series 3: Paragraphs to Essays, Forth Edition 2007, Pearson Education Inc.